伊豆便り

「巡礼アート」

田島　征三

「幾山河越えさり行かば哀しみの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」

若山牧水の歌が、僕の頭のすみっこから、モクモク飛びきてきたのだった。ぼくは小学校の５、６年生の時、担任の若い女教師の影響もあって、島崎藤村や北原白秋の歌などを暗唱した。その時覚えた歌がなにかの拍子に出てくることがある。この牧水の歌も、朝の目覚めの時突然浮かび出たのだった。

日の出の廃棄物巨大処分場建設計画反対運動の中で頭にこびりついた記憶や心に染み込んだ想いも、きっとこれからの人生の旅路の途中でひょいと心をよぎるのではないだろうか。

さて、牧水の歌の事だが、これは思いもよらぬ形で、今年の大イベントに結びついてしまったのだ。香川県善通寺市は空海、すなわち弘法大師の生まれた街である。香川県は瀬戸内国際芸術祭によって全国的に注目を浴び、国内外から多くの人々が忘れられていた離れ小島に呼び寄せることに成功した。

公開制作の様子　2024年
勝央美術文学館にて

ある島では、とっくに廃校になっていた小学校が開校することになったり、新しく航路が開けたりしている。香川県全体でも芸術祭の影響で街や村を活性化させようとする動きがあり、この善通寺市でも「巡礼するアート」と言うイベントを2025年12月から2026年1月にかけて開催することになった。そこでぼくは400号キャンバスに巨大な絵を描くことになった時、牧水の歌だった。深い悲しみを抱えたまま旅をする人、四国八十八箇所箇所を巡礼する人の心の哀しみをぼくは想う。ハンセン病の人々が100年以上にわたって逮捕拘束されて隔離収容と言う耐え難い人権無視の人生を強要された高松沖の大島で、ぼくは今、心も体力も打ち込んで作品を作り続けている。この10年以上にわたって親しく交流してきた野村宏さんご夫婦のつらい旅のことだ。お二人は、美しい恋愛の末、患者同士だが幸せな結婚をする、そして愛の結晶が奥様の体内に宿ったのだ。普通なら喜びに溢れる時であるのに、ひどい仕打ちが待っていた。国の法律によって強制中絶され、赤ちゃんはホルマリン漬けにされて人目にさらされたのだ。ハンセン病が遺伝するだろうか。この地上で、哺乳類が今日のように繁栄できたのは哺乳類に胎盤があったからだ。この胎盤が有害物質や細菌から胎盤内の生命を守ったのからだ。

だが、現在では放射性物質、有機水銀、廃棄物の焼却により発生するダイオキシン（日の出町の２つの巨大処分場には東京都民を数回殺害できる量のダイオキシンが今も埋まっている）など、胎盤通過性の化学物質により人類だけでなく、哺乳類に大きな災いが襲いかかろうとしている。ハンセン病菌であるライ菌は胎盤を通過するものではない。従って野村さんの奥さんのお腹
の大切な命はハンセン病ではなかったはずなのだ。にもかかわらず国の法律でこの宝物の命が殺害され、ホルマリン漬けにされた。こんな悲しい出来事を野村さん夫妻が受け入れることができず、四国巡礼の旅に出たのだ。その哀しみを僕は400号の巨大キャンバス視覚化しようとしている。